

6. バイオガス化施設 視察報告書

民間バイオガス化施設の視察(報告)

項目		1. 町田市への導入について、周辺住民・環境に配慮すべきことは。	2. 地元への還元策として、どのような可能性が考えられましたか。	3. 発酵残さの利用について、安定供給先確保の可能性は感じましたか。	4. 安全対策について、有益な設備・システムはありましたか。	5. その他、感じたこと。
候補地選定 専門部会	百武 副部長	●騒音、振動の問題はバイオガスプラントについては感じなかった。 ●悪臭については十分な対策が必要。視察先は、ごみピット近くではかなり強い悪臭があった。ごみピットから少し離れるとほとんど臭いはしなかった。(敷地入口近くでは感じなかった。)	視察先は、見学コース、見学者のための紹介ビデオ、会議室などは整備されていた。主に産業廃棄物を扱う民間業者であるという点で町田市とは違いがあり、取り入れるべき点は冷静に考えるべきであると感じた。	将来的に残さの肥料化を考える場合にもプラスチックの混入をどう防ぐかは課題となるだろう。	敷地入口のゲート前に、環境監視表示盤を設け、排ガスの濃度(ばいじん、NOx、SOx、塩化水素、一酸化炭素について24時間データを表示していた。敷地に入らなくてもデータを24時間表示していることは、周辺住民に対する安心感を高めるうえで効果的であると感じた。	●パンフレットには、当該バイオガスプラントをフル稼働すれば一般家庭が1400件が一日に消費する電力が発電できる、ごみ1kgから監修されるバイオガスで1.1km走行できる、といった表現がされている。市民に対して、こうした表現をするとわかりやすいのではないか。
	稲木委員	●今後作る施設については「絶対に必要な施設」ということについて理解と協力を求めていくこと。 ●「緑地等の保全」「希少動物の保全配慮」「経済性」「道路幅・地形」「教育施設等」について十分に配慮しつつ、従来からある「迷惑施設」という概念を払拭する努力をおこなうこと。その中であくまで住民の合意形成をはかること。 ●町田市では臭気対策がかなり重要。	●町田市では、余熱施設 エネルギー供給施設等が考えられるが、住民の要望を聞きながら、可能な範囲で還元するべき。 ●地域サービスの向上や防災機能の強化等を含め、周辺地域のメリットとなる施設。	町田市では、燃やしてエネルギーを回収することが考えられる	環境監視盤の導入により、付近住民に「排ガスの数値」を公開	●十分な臭気対策が必要。 ●視察先は、住民との協定を結びトラブルなく運営していた。これは大事なことである。
	金田委員	●搬入車両の台数制限、速度規制 ●2ヶ月に1回の環境測定、その際に地域住民の参加、測定結果の公開	●バイオガススタンドがあり自動車燃料使用や発電での売電など ●敷地内にビニールハウスが設置され、地元の方が農園を営んでいる。(サーマルリサイクルの廃熱利用)	コンポスト、堆肥は市場流通性に乏しく、原因究明が必要。収集ごみの質、量に課題あり。	国産設備を評価し、慎重に検討を要す。外国製はメンテナンス性に問題が生じることも考えられる。	同システムは、自治体などの支援が必要。支援がなければ継続は難しいと思う。
	富岡委員	臭気対策。町田では漏れない対策が必要。現在の技術では可能ではないか。	●対象地域の車にガスを安価に提供。 ●余剰電力について、町田では発電、プール、野菜工場、果樹園などで利用が考えられる。 ●施設内を集会場、防災備蓄倉庫として、親しみやすい施設として活用。	町田では残さを熱源として利用しているが、技術が進めば堆肥として活用法があると思う。	●臭気の中で作業していることで、長時間また長い期間作業することにより健康障害が心配、臭気対策を。 ●工場正面前に表示盤を設置し住民に公開。排ガス等の濃度、発電量、稼働率等。ネットでも公開。	民間の経営ではあるが民間の良さと公益性を考慮、行政、市民との協働が必要を感じた。視察先は施設規模に対して、収集される生ゴミの量が少なく、行政と市民の意識改革なくしては改善されない。生ゴミの収集方法と仕分け方法の工夫が必要になる。
	高橋倫正 委員	安全性の啓発と確保。	燃料、熱の供給、肥料として活用	肥料として利用できるか実験検証すること。農業関係者との連携が必要。	●従業員の身体への対策。 ●周辺への臭気対策。	50トン規模を作らず、段階的に増設した方がよいのではないか。
整備基本計画 専門部会	伊東委員	●構内道路として待車が一般道路に並ばない仕様 ●空地の20~25%の緑化基準 ●換気の脱臭設備の排気口などの施設配置には工夫が必要	直接給電や熱供給において「直接目に見える地元還元」として無料や格安という要望や施策があるが、これには慎重な検討が必要である。 第一の大きな課題は、還元区域の線引きにある。区市町村行政事務として行なわれるごみ処理は迷惑も恩恵も含めて全体の公共財であるべきとの視点もあるから周辺の特典はほどほどとすることが望ましい。一方、公共財ということで公平だけにこだわると、せっかくの還元施設が遠方から車で利用する人たちには利便で、結果的に周辺には環境負荷が増えることしかもたらさなかったと指摘される例もある。	●供給と需要のアンバランスのバッファ(貯留設備)が必要となる。このスペースと管理が重荷になるので、現状では焼却が、もっとも合理的かつ妥当と思われる。 ●大本から減らすために、肥料メーカー(近いところにある工場が理想的)の原料仕入れルートに乗せる方法(排出事業者や排出方法)を考えるのも基本的な手法である。	●余剰ガスは燃焼装置で燃焼して排出する。強風対策の膜おろしなど、視察先のような山間地にある施設とは違い、町田市の場合は単純な大気開放だけでは済まないのではないか。 ●臭気対策について、実務経験者として言えば、臭気や振動については把握しきれない要素があり、エンジニアリングで完全に対応するのはなかなか難しい面がある。	●(資源化施設の破砕機について)防爆対策と火災対策については、行政の判断に拠るところが大きい。
	小林委員	臭気対策。穂高広域施設組合のようにすべき。	災害が起きたとき周辺への電気の供給か、ガス供給。	安定供給先の確保は難しいと思った。	危険な施設と言う印象はなかった。	●何故、行政の参加をきちんと確保できなかったのか?何故、京都府や南丹市をはじめ行政は技術的には確立しているこのプラントを応援しないのか、疑問であった。 ●バイオガスプラントは考えていたよりもずっとコンパクトであった。 ●「環境にやさしい…」とか「行政・市民・事業者との協働…」「地球温暖化…」たくさん言葉を見聞きするが、「実は本当に実現しようとはしていない現実」の中、町田市の選択は本当に価値のある稀有な選択だと改めて思った。担当職員の、「行政が関われば、こんな臭気はさせません」の言葉に、『先進事例は無い、町田の取り組みが先進事例となる』と強く感じた。
	高橋清人 委員	徹底的な臭気設備対策。	周辺住民に目に見える還元策。(電気・ガスの無償供与)	堆肥化はやはり難しい。	特にない。	紙類が入っている方がガスの発生がよいので、「燃やせるごみ」に含まれる紙類であることを前提に量的なバランスを考えるべき。
まとめ	臭気への配慮の声が多かった。	周辺にお住まいの方への「電気やガスの供給」の声が挙がっているが、一方で供給については慎重に進めるべきとの声もある。また、「防災設備」としての役割が提案されている。	整備基本計画専門部会員からは「安定供給先の確保は難しい」との声が多い。堆肥化の可能性を探る提案も出ている。	測定データの公開は、周辺にお住まいの方への安心につながるのと考えから、環境監視表示盤の設置の声が多かった。		